

Title	バトラーとドライデン : (諷刺詩発展の一段階)
Author(s)	山村, 武雄
Citation	英文学評論 (1954), 1: 15-28
Issue Date	1954-03
URL	https://doi.org/10.14989/RevEL_1_15
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

バトラーとドライデン

(諷刺詩発展の一段階)

山村 武雄

バトラーの『ヒューディブラス』第一部が出版認可になつて、リチャード・マリオットによつて版權登録がすんだのが一六六二年十一月十一日だが、それが書かれたのはいつだつたか。これについて決定的事實は挙つていないが、リカルド・キンタナはモダン・ランゲジ・ノウツ誌に載せた一論文で、東印度会社社長ジョージ・オクスンデンにバトラーが寄せた一六六三年三月十九日付書簡に、『ヒューディブラス』第一部は「はじめて閣下の知遇を得ました頃から余り遠くない時分に書かれました」とある事實から興味ある推定を下して、「知遇を得た頃」を一六五九年六月から一六六〇年五月十四日の間と考へるのが最も妥当であり、従つて「書かれた」時期は「それより余り遠くない時分」ということになると思へている。もつとも實際に筆を染めたのはその時ではないので、同書簡にも、「主人公ヒューディブラスのモデルは西国の騎士で、当時議會軍の大佐であり、議會の州代表委員でもありました。この人と私は(ロンドンの)ホウボンで同宿したことがあつて、近づきになりましたが、その人柄が全く愉快なので、後にも先にも全く経験のない書きなぐりを始めました。その性格描写をできるかぎりモデルに近づけようと努めましたので、本人を實際に知つてゐる人は一見してわかるほどでした」と書いてゐる。当時とはいつで

あつたか。定かには分らないが、「議会議の大佐であり、議会の州代表委員でもあつた」ことから推して、文武の官職と両院の議席を兼ねることを禁じた「権利放棄令」が通過した一六四五年四月以前であつたことは確かである。また「後にも先にも経験のない書きなぐり」とあることも彼の「遅筆」のはからざる告白であるとして差支えない。こうして書き溜められたものが、王政復古（一六六〇）の機運が熟するのを見て、纏められたのであろう。「ヒューディブラス」第一部は彼の詩作の第一声となつた。齡五十である。それから一六七七年八月二十二日『ヒューディブラス』第三部の版權登録をすませ、一六七八年の日付で十一月六日以前にサイモン・ミラーによつて出版されるまで、丁度十六年間彼は諷刺詩人として活躍したわけである。彼は一六八〇年九月二十五日結核症で死んだ。

一方十九才年少であるドライデンは一六六三年から一六八一年の劇作時代を経て、諷刺詩の時代に入り、一六八一年十一月中旬『アブサロムとアクトフェル』を出版し、続いて『メダル』が一六八二年三月、『マック・フレクノウ』が同年十月、『アブサロムとアクトフェル』第二部がその一カ月後に出版された。ドライデンが宗教を始めてとり上げたのが『アブサロム』第一部と殆んど同時に出た『平信徒の宗教』と一六八七年四月の『牝鹿と豹』である。従つてドライデンの諷刺詩人としての活躍はベトラの死後一年余にして始まり、約五年半ほど続いたわけである。

ドライデンはこの諷刺詩の先輩に対してどんな態度をとつたであろうか。およそドライデンとベトラほど顕著な対照をなすものは少いであらう。批評、劇、諷刺詩、叙情詩、翻訳と行くとして可ならざるなきドライデン、三十七歳にして桂冠詩人に任ぜられたドライデンと、めぼしい作品としては『ヒューディブラス』だけで、後は『月の中の象』『英国学士院について』『人間の弱さと不幸について』『放縦なチャールズ二世時代について』『とばくについて』『笑うべきフランス人模倣について』『飲酒について』『結婚について』『古代人の規則によつて現代劇を批判する批評家について』『ひようせつについて』『学問の欠陥と誤用について』などの短い諷刺詩と、「智慧と愚行」など五十の抽象的題目を諷刺的に扱つた『詩宝典』、更に『偽善的非国教徒について』『現代批評家について』『有名なドウ・ヴァルの靈に捧ぐ』の三篇のピンダリック・オウド、皮肉な二篇の

ベラッド、ボワローの『押韻に対する諷刺』及びオヴィツドの『シディッペがアコンティウスに与えた返書』の二つの諷刺、
『雄猫と雌猫のレパティ』他八つの雑篇、それに三篇の讃辞があるのみである。これがバトラーの詩作全部で、散文としては
キャラクタ（一種の諷刺的性情描写）が一八七篇とジョセフィン・バウアがモダン・フィロロジ―誌四五号（一九四八年）で新
しく加えたといわれる数篇、及び種々の覚書パンフレットがある。彼は諷刺のみに専念した。もつとも劇作に手をつけたり、
桂冠詩人への野望も抱かないわけではなかつた。一六六五年頃の匿名の詩『詩人の会議』には

「ついでヒューディブラス 不敵にも桂冠を望みしが、アポロ神は はやる彼をたしなめて、既に筆の力衰えを見せ始めた
れば、劇作を断念せよと忠告しぬ」

とあり、T・R・ナッシュ博士は所蔵のバトラー原稿の中に未完の悲劇『ネロ』があることを記録しているとド・ピアは報告
する。バトラーは生涯要職にありつけなかつた。王政復古前もウスター州のジェフリズなる治安判事の書記であつた位のもの
だが、復古後も一六六一年一月からまる一年間ウニルズの長官カーベリ伯、リチャード・ヴォーンのために、ミルトン『コウ
マス』ゆかりのラドロウ城の執事となつたこと、バックingham公ジョージ・ヴィラズが一六七一年五月一日から一六七四年七
月十一日までケンブリッジ大学総長であつた間、少くとも一六七三年七月以後は総長秘書をしていたこと、の二つしか記録が
残つていない。こんな風にドライデンとバトラーは文学的、社会的生涯において、きわ立つた対照を示している。ドライデン
はこの恵まれざる諷刺詩人に対して同情こそすれ、悪意はもつていなかつた。『牝鹿と豹』の第三部で牝鹿（カトリック教）は
豹（国教）に向つてこう語つている。

「されどわが子ら 貧ゆえに 米塩を乞ふとしならば 心得て 汝が門は敲くまじ。世に捨てられしヒューディブラ
ス、汝が闘士、の赤貧は、汝が施しの薄きを示す。いやはての世までも残る この詩句を 墓碑に刻まん。『かの人
（豹）は生ける御身をはずかしめ、死せる御身を叱責す』」

言うまでもなく、ヒューディブラスはバトラーの別名であるが、バトラーがいかに国教の「闘士」であつたかは『ヒューディ

「ブルース」を見るのが早道である。『ヒューディブラス』の主たるねらいはオクスンデン宛のバトラーの書簡によつても分るよ
うに「当時権勢をふるつていた長老教会派、独立教会派の愚行、邪悪の正体を曝露することのみであつた」ので、国教擁護の
立場に立つてゐることからでも想像がつくのであるが、彼が報酬を求めたとすれば、国王からであることは先の桂冠詩人希望
についての揶揄にほの見えてゐるのである。事実チャールズ二世は彼を全然無視したわけでなく、一六七七年十一月十七日に
は一時金百ポンドと年金百ポンドを彼に与えるよう取計つてゐる。但しこれも一六七八年九月二十五日までは年金は未払にな
つていたらしく、その日に御璽卿にバトラーに対して残余金とミクルマスの四季払をするよう命じてゐる。ドライデンがチャ
ールズ二世の治政の末期（一六八五頃）にロチェスター伯に宛て給金の支払をせまつたとき「一つの時代がカウレを疎んじ、
バトラーを飢えさせただけでたくさんではありませんか」といつたのは右の事実を知らないで、当時流布された噂に従つたま
でであろう。

二

バトラーの諷刺詩、主として『ヒューディブラス』をドライデンとの関連に於て眺める場合に、二つの方法があるように思
う。一つはドライデンが当代の代表的批評家であり、しかも諷刺詩の実地について充分経験をつんで、一六九三年に書いた
『諷刺の起源と發達についての論考』がある。この論文によつて、ドライデンがバトラーの諷刺詩を如何に考えたか、そして
その批判の下に自己の諷刺詩を如何に發展せしめんとしたかを知ることであり、その二は内乱時代の長老教会派と独立教会派
の在り方を批判した『ヒューディブラス』と、ドライデンが宗教を扱つた諷刺詩としての『牝鹿と豹』を實際に比較検討す
ることである。

英国諷刺詩人中ドライデンが最も敬意を表した一人はバトラーである。「わが傑出したヒューディブラス」と呼び、「彼の
詩の価値は余りに世間周知のことなので私が今更推賛の辞をのべる必要はない。私が批評する余地を残してゐない。」「結局、

彼はこの種の詩形（一行四詩脚のペーレスクと称せられるもの）を選んで、その絶品をものした。若し他の詩形を選んでおれば、その詩形に於て必ず すぐれたものを書いたであろう」と口を極めて賞讃している。

ドライデンは彼の諷刺詩を一言にして「ヴァロ流の諷刺詩」と規定している。「ローマ人中最大の碩学マーカス・テレンティウス・ヴァロが創始したからこの称があるが、ヴァロ自身はキニク学派の哲学を説いたガダラの人メニッポスの手法を真似たので、メニッポス流の諷刺詩と呼んでいる。」「ヴァロの諷刺詩は、とるにたらぬ断片、しかもその殆んどが他人の加筆変更をうけたもの以外は全く現存していない」ので、同時代人キケロの『アカデミクス』の言葉を参照するほかない。その中でキケロはヴァロにこう語らせている。「私は私の作品の中で、メニッポスを翻訳したわけではなく、ただ模倣しただけなのだが、その作品に私は一種の巫山戯を織り交ぜた。しかし作品には哲学の内奥からひき出されたもの、仮借なき論議を戦わせたものが数多く含まれている。これらのものが無学な読者にたやすく受け入れられるようにわざと巫山戯を交えたのである。」キケロはヴァロを親しく知っていたであろうし、その言を信用するほかないが、ドライデンは語をついで、「これから見ると、ヴァロは所謂「笑いを追求する」（スプドゲロイオイの）作家で、彼自身は学者であつたが、彼のめざすところは読者を教えるよりも楽しませることであつた。そして彼が自らの諷刺詩をメニッポス流と名付けたのは、メニッポスが諷刺詩を書いたという意味ではなく、（というのは彼は対話と書簡しか書かなかつたから）、ヴァロがメニッポスの文体、手法、おどけを真似たからである。メニッポスと、今は完全に失われた彼の作品、についてわれわれが知るすべてのことは、ある人達、就中ヴァロによつて尊敬されたこと、他の人達によつて冷笑的鉄面皮、鄙猥の人とみなされたこと、他人の詩文のもじりを好んだことである。しかるにヴァロの諷刺詩はキケロによつて完璧にして極めて優雅、多彩な詩と称せられた。：しかしヴァロはメニッポスを模するにあつて、その鉄面皮と鄙猥性を避け、単に機智に富んだ諧謔のみを示した」といつている。ドライデンはローマの諷刺詩人、エンニウス、パクヴィウス、ルシリウス、ホラティウスの伝統の起源を、バックス祭祀に於けるサタ（牧羊神）の踊りにも求めず、ローマ独創説、即ちサターン（農神）の祭フェシニア祭の粗野な即興詩にも求めず、ギリシヤのアリストファネスの

古喜劇の個人的揶揄をリヴィウス・アンドロニクスがローマ喜劇に復活し、これにローマ在来の音楽と踊を伴う即興詩、ランクス・サテュラ（雑多の食物をのせた皿）を加味したものから生れたとする。しかしヴァロ流の諷刺詩はこのローマ諷刺詩人の伝統とは別個のものと考へるのである。そしてその特性は「笑いを追求すること、つまり「諧謔」「おどけ」の要素である。

英詩でこの要素をもつものは「スペンサーの『マザー・ハーバーズ・ティル』と、はばかりながら、『アブサロム』の両詩と『マック・フレクノウ』である」とみえを切つて、一応総論を終り、ホラティウスと、ユヴェナリス、パーシウスの比較論に入つて行くのであるが、この比較論が終つたところで先に挙げたベトラがヴァロ流の諷刺詩であるという言及があるのである。

それではドライデンは諷刺詩の理想的形態を如何に考へたのであろうか。「諷刺詩の最良の手法は、ユヴェナリスとホラティウスの比較論で充分述べ尽した。すなわちそれは鋭利に品よく愚行を笑つて、顔色なからしめることである」といつている。ユヴェナリスは心あるものが聞いて義憤を感じるような悪徳を痛烈に攻撃し、ホラティウスは本人が聞いて穴あれば入りたい思ひをさせるよう、軽妙に揶揄しようとする。（ただし結果は必ずしも成功したとはいえないが。）一は悲劇性を有し、他は喜劇性を有する。ドライデンはこの後者の手法をとらんとするのである。ヴァロの諷刺詩は喜劇性をもつという点でホラティウスと一脈相通するものをもつてゐるが、「笑いを追求し」「教へるよりも楽しませることをめざす」力点のずれが、ともすれば笑劇（ファース）に移行させる傾きをもつ。この点を考慮すれば、ドライデンの言葉で「一見矛盾すると思はれることも理解できるのである。即ち先にヴァロの諷刺詩の中に入れた『マック・フレクノウ』は紛れもなくヴァロ的であるが、『アブサロム』の両詩を全体的に見れば決してヴァロ的ではない。ヴァロ的であるとすれば、ジムライ（ベッキンガム公）とオグ（シャドウェル）の性格描写であり、しかもジムライをホラティウスの手法による上々のものと自負してゐる。それはヴァロとホラティウスが相通する点でとらえられてゐるからである。

文体については高貴性をねがう。「英雄詩が人間の最も偉大な作品である」との根本觀念に立ち、「諷刺詩も勿論英雄詩の一種である」と考へる。英雄詩にふさわしい美しい言葉と思想の展開は一六七二年頃ウォラーとデナムに見出すように教わつた

が、その後 自覺的にこの点を追求するようになって、スペンサーに好個の範を得た。ダンはホラテイウスの手法と、思想の辛辣性をもつが、詩の様式に遺憾の点がある。「諷刺詩に於てのみならず、自然のみが支配すべき恋愛詩に於ても、形而上學を銜う」と非難する。一方バトラーの詩形は彼の筆にのせられると うつてつけのものとなるが、「他人がこれを用いると、詩行が短かく、押韻が早く回つて来て、文体の莊重味をうしなうことになる。その上 この種詩形につきものの二綴押韻は男らしい諷刺詩にふさわしくない。真面目なものを茶かし、子供っぽいすぐりをやるからである。げにかかる巨匠がこんな小道具を使つては姑券にかかわるのだが、彼の勘のよさはたえず行間に光つていて、文句をつける隙をあたえないのである。われわれが押韻の輕薄さを通過すると、すぐに感嘆すべき有用な思想にぶつかつて惹きつけられるのである」という。ドライデンの好むところは五詩脚の詩形である。

三

『ヒューダイブラス』と『牝鹿と豹』を比較して見たいが、筋と文体に分けて考えよう。

『ヒューダイブラス』は『ドン・キホーテ』に基いて想を構えている。ドン・キホーテに当るのがサー・ヒューダイブラスで、サンチョ・パンサに当るのがラルフ、ロジナンテに当るのが 凶体は大きい星の入つた隻眼、肋骨は浮き出、尻尾は地をひきずつて泥をはねかけるあわれな馬であるが、それ以外に人物も事件も似通つたところはない。サンチョ・パンサはドンキ・ホーテに臣従して忠勤をつくすが、ラルフはヒューダイブラスと終始口論している。ドン・キホーテには理想的に美化された恋人ダルシネア・デル・トボソがあるが、ヒューダイブラスの相手は金持の未亡人で、彼の気持は恋というより慾の皮のはつたささしいものである。

時は内乱の初め、氣違いか酔つばらいのように人々は宗教のためにいくさに狩り立てられて行く。ヒューダイブラスも大佐として出陣である。文武に秀で、法廷の雄にして、乗馬の名手、ヘブライ、ギリシャ、ラテン語をよくして、それを矢鱈に英

語に混ぜるのでんだら染のよう。論理学、修辭学、数学、哲学、スコラ神学、何でもござれである。宗教は長老教会派で、すべて武力で解決する文字通りの戦闘教会である。容貌は狐色の長髯が特徴。隆々ともり上つた僂僂の背中と鈞合いをとるように田舎料理のホワイト・ポット、バタミルク、凝乳を詰めこんだ便々たる太鼓腹。ブレンの包圍戦（一五四四）にも加つたという由緒あるズボンの裏にはギッシリ兵糧をつめ込んで、時に鼠がこれにつき、うっかり手を入れると噛みつかれる始末。赤錆びの業物トレドに短刀、ピストル二挺が武器。似合いの従者ラルフは独立教会派。裁縫師の家に生れ、主人に劣らぬ知識の持主だが、ある人はこの知識を「天恵」と呼び、ある人は「新しい光」と呼ぶ。この光によつて裁縫師が針に糸を通すように、衆々と深い神秘を解くのである。

英国西部のある町にくまいじめが行われている。これをうちすておくことはヒューディブラスの徳義心と職掌柄が許さな
 5。

ラルフ「これは明かに、非キリスト教徒的です。第一、熊いじめという言葉は、聖書にない、人間のつくつた、肉的东西です。またこの会合たるや、長老教会の諸会合のように、聖書の裏付けがありません。第三に、偶像崇拜です。犬いじめであれ、熊いじめであれ、人間の創つたものにならうつつをぬかすことはダゴンの礼拝と変わりありません。」

ヒューディブラスは、長老教会の会合も不法であるとするラルフの説に反対すると、

ラルフ「二つは罪の点は勿論のこと、何から何まで酷似しているので、二つを袋に入れて振ると、あなたでさえ、その邪悪の度合で測らない限り、何れが何れとも分らないでしょう。というのはどちらがより悪いかは明瞭なのです。それ以上は申しません。」

ヒューディブラスは言葉の戦でなしに、行為の戦の場が近づいたと議論を打切る。（一・一）

敵の面々は、先頭に隻脚の胡弓ひき、クラウデロ、続いて、医術に長じ、薬袋を離さない熊飼のオーシン。次は熊のブルー
 ン、屠殺者のトールゴル、いのししのように獠猛で、魔術に通ずる罫掛屋のマグナノ。彼はアマゾンのペンテジリアより勇

敢な女丈夫、トララを愛している。その次は正直者で義侠心のある靴直しのサードン。最後にセントーにも劣らず、人馬一体の馬術の達人、残忍なコウロンである。

ヒューディブラスは聖徒が互に血を流し合うことは厳肅同盟の趣旨に反する。張本人として胡弓ひきを引渡して、めいめい家に帰れと命ずるが、トールゴルが 要らざるおせつかいと抗言するので、頭めがけてピストルを発射せんとするが、鏑で撃鉄が動かない。トールゴルとヒューディブラス、コウロンとラルフが渡り合う間に、マグナノは刺のついた薊でヒューディブラスの馬の尻をたたくので、はずみを食つて彼は熊の上に落ち、失神する。熊は驚いて綱を切つて暴れだし、群集を追い散らす。唯一人義足をやられて逃げ遅れたクラウデロは捕虜として引立てられ、監禁される。(一・二)

それより前、ヒューディブラスは未亡人に余り冷やかにあしらわれるので熱もさめかけていたが、この勝利に気をよくして、勇氣と才智を以てすれば必ず女は射とめられると、急に未亡人訪問を思い立つのであるが、この時先に追い散らされた敵が逆襲して来る。奮戦の結果、女丈夫トララに組敷かれ、上衣を剝がれ、代りに女用のマントをもらつて、二人共足枷にかけられる。こうして自由を奪われた状態で、熊いじめと長老教会の比較論議が蒸しかえされる。

ラルフ「宗会議は神秘的なくま園です。長老、代理人、教区委員が命令、規約、譴責、破門、赦免という鎖で縛り上げて、聖徒の魂と良心をいじめ抜くのです。書記、委員、審問者は妻子を養うためには詐欺を働くばかりでなく、富と権力を獲得しなければおさまらず、詐欺ですまなければ、流血と破壊によつても国民からもぎとるのです。こんな教会は多頭の怪物とでも言うべきでしょう。」

ヒューディブラス「君は比較すべからざるものを比較している。君の議論は仮説に過ぎない。」

ラルフはヒューディブラスの議論が人間の学問の悪用であり、学問は天啓を妨げる邪魔物であると主張するが、ヒューディブラスは脱線を警告する。(一・三)

一方未亡人は「評判」の女神からヒューディブラスの受難をきき、親しく訪問して散々嘲弄した挙句、金銭目あての恋であ

ると本音をはかせ、笞刑を条件に自由の身とする。ヒューディブラスは日が暮れたので笞刑を翌朝にのばして家に帰る(一一)。

朝になつて彼は約束の如く城に行つて笞刑をうけようとするが、途中で、笞打たれることをやめにするのが約束の破棄となるか、笞打たれるより偽誓する方が罪が軽いかどうかという疑問が湧いて、ラルフに相談する。ラルフは「偽誓の方が罪が軽いと思う。内なる人間と外なる人間は相剋するが、これは精神的、神秘的に行われるのであつて、文字通りに両者を戦わせるのは異教的である。笞打を悔悟、苦行と称するが、小なる罪を大なる罪でつぐなうことになる。また聖徒は時に偽誓することが許される。誓は言葉であつて、空気に過ぎない。誓いが影なら、行為は実体である。自分の利益以上に約束に縛られる必要はない。悪魔が自分の都合によつて真理を語りうるなら、聖徒が偽誓することを恥じる必要はない。過去に長老教会のなしたことは偽誓だらけである。公の約束に於て然り、まして個人の約束に於ておや」というと、ヒューディブラスは「そんな難しい議論しても俗耳には入らない。詭弁を弄するに限る。例えば、偽誓は、無理に誓わせる側とやむを得ず誓わされる側とに分けて考えねばならぬ。偽誓の場合、無理に誓わせる側の方が罪が重い。その上牢獄の中の誓は釈放と同時に消滅する、といつた具合に。これで自分の『面目』が保てなければ所詮どうしたつて駄目なのだ。」

ラルフは「面目」ということに価値を認めないが、ヒューディブラスは世間の思わくを無視できないので、体裁を繕ろうため、代理にラルフが打たれることを命ずる。しかしラルフは頑として承知せず、乱闘になろうとするところに大音響がして、赤いペティコートを槍の先にひらつかせて、細君閨白の凱旋式が通りかかる。これが異教的であるとして、行列に二人は乱入するが、卵のつぶてを投げつけられて、ほうほうのていで逃げる(一二)。さてこのまま未亡人のところに行かなければ、笞打の約束を果さなかつたと思われるだろうし、行つて下手に口を滑らしたり、背中の鞭あとを見せてくれとでもいわれば、それこそ名誉も恋も一遍にふいにしてしまう。何とか成功の確信がつくまでは足が踏み出せない、と迷つているのを見て、ラルフが近くにシドロフェルなる評判の星うらない師がある、それに占つてもらつたらというので、早速行くことにする。シドロフェルは助手のヴァカムと庭のオペリスクにかけた望遠鏡で星を見ていると、ちようど子供が尻の尾に燈をつけて飛ばして

いるのが目について、新星現る、世界終末の凶兆ではないかと騒ぐ。そこにヒューデbras一行がやつて来るのが見え、ヴァカムは愛想よく出迎えて、それとなくラルフから用件を嗅ぎだし、主人に知らせる。それとは知らず、ヒューデbrasは用件をピタリとあてられて魔法ではないかと疑う。しかしシドロフェルがヒューデbrasに占星術を信じさせるため彼の過去を示す天象図を書く段になつて、馬脚をあらわし、このペテン師をひとつとらえてくれると、ラルフを警官のところに走らせる。シドロフェルはラルフの留守の間にと槍で突いてくるが、うまくかわされ、窮余の一策に死をよそおつて倒れる。ヒューデbrasは空恐ろしくなつて、ラルフには先の仕返しとして何も告げず逃げ出す(二・三)。ラルフの方でも、考えてみれば戦つては強奪した脛に疵もつ身、うっかり警官につかまるよりは、管打の一件の腹いせに、残らず未亡人に告げ口してやろうと、ヒューデbrasより一足先に着いて喋つてある。知らぬヒューデbrasが大袈裟に管打の痛みを物語るが、結局シドロフェルの魔法にかこつた嘘の上塗りとなる。その時はげしく戸を敲く音がして、てつきりシドロフェルの来襲と考えた彼は机の下にもぐる。しかし闇の中に引きずり出され、悪魔に扮したものによつて、流いざらい生活の裏面を告白させられる。悪魔が消え去つた後、妖精、実はラルフに助けられ、馬で逃げ出す(三・一)。ここで物語の衣をぬいで、現実をむき出しに見せる。宗教のための戦も下火となり、今まで主導権を握つていた長老教会は独立教会にとつてかわられ、「主人役」ではあり得なくなつた。長老教会派の抵抗精神の権化とも言うべき男(リルベン大佐)が「最近われわれ非国教徒の間に敗戦主義が見えて来た。しかし王党に対して捨身の勇をせばまだまだ形勢挽回の余地はある。かくなつたのも「契約」の本義を忘れて精神的に墮落したからである。眼前に絞首刑が待っているのを思えば、ここで両派は握手すべきだ。長老教会は永年の苦勞にもかかわらず、報われるところがなかつた。しかし豊富な経験をもつわれわれが国政に加われれば大なる力を發揮する」と説く。独立教会の策士、『アブサロム』のアクトフェルとして描かれたアシュリ・クーペ、後のシャフペリ伯)は「長老教会が実権を失つたのは実力の致すところである。由来、一事に専心、忠節に励むものは不遇で、機を見て節を変えることが肝要である。政権にありつくにはまず金。そしてある時は王に、ある時は民衆に熱心に味方して、実は自利を図るのである。結局方策として

は新教非国教徒の団結をはかることが大切である」と答える(二・三・一)。ヒューディブラスは、夜が明けて、馬上の妖精はラルフであることを知る。ラルフは未亡人との経緯を法廷で解決することをすすめ、二人は弁護士のところに行くが、弁護士は先ずシドロフェルを魔術師の廉で逮捕し、夫人の方は徐々に働きかけることをすすめるので、未亡人との間に手紙が交わされる(三・三)。これが一万一千余行の荒筋である。第一部第二篇の冒頭で「騎士物語は『恋』と『戦』以外の何物でもない」といつているが、『ヒューディブラス』が騎士物語の形式をとる以上、この二つの基点の上に転回することは必然である。しかし『恋』について語るべき大きな問題をもつていないが、『戦』については言いたいことが山ほどある」のである。物語で『戦』の事件を提供するのは熊いじめであり、これがまた長老教会揶揄の恰好の題材となるのであるが、もつと大きな『戦』の要素はヒューディブラス(長老教会)とラルフ(独立教会)の精神的葛藤である。従つてバトラーとしては、深刻な宗教的闘争の赤裸々な描写という丸薬に滑稽な騎士物語の糖衣をきせて、一種のカタルシスを起そうと企てているのであり、事件が少く、議論が多いことそれ自体をかこつことは当を得たことではないであらう。騎士物語の形式をとりながら、『恋』が何故こんな非ロマンティックな形をとつたか。『ヒューディブラス』が発行されて一年七カ月後、海をへだててフランスでは、僧侶ということをだした色仕掛の財産横領企図をプロットとするモリエール『タルチュフ』三幕が上演されたが、王政復古期の好尚がドン・キホーテのような恋を受け入れないし、諷刺という形式の要求もある。事実内乱初期には婦人にとり入つて、軍資金をかせぎ、男子に働きかけさせたものらしく、『ヒューディブラス』第二部第二篇にはヒューディブラスが「われら初代の使徒にして、その援助なしにはわれらの戦も敗れたであらう婦人、剣、騎銃、ピストルを購わんため、愛児の匙、笛を献納し、夫、お人よし、恋人を聖徒の味方にひき入れた婦人」と讚美しているのから推して、彼ら僧侶が婦人を功利的に利用する術を心得ていたのであらうが、相手を未亡人としたのはバトラー自身の経験から生れたものではなからうか。これは確定的な事実ではないが、ヘンリー・ポーンは「彼は名家の出であるといわれるハーバート夫人と結婚した。彼女が未亡人であつたかどうかは、証拠に喰い違いがあつて、わからない。彼女が莫大な財産をもつて来ることを期待したが、その大部分、悪い抵当で貸付

けられたり、詐欺にかかつたりして、余り得にはならなかつた」といつているが、『ヒューディブラス』第一部第一篇で「名譽は、処女のようにじわじわ近づくのでなく、未亡人のように、威勢よくもちかけ、ぐんぐん押して行き、男らしく踏み込んで、せき立てることによつて獲られる」といかにも体験から滲み出たような表現をしている。この『恋』を基点として、誠実を看板にする非国教徒の偽誓、偽善をつくことができ、占星術をとおして、当時隆盛におもむいた科学にたずさわる者の自己欺瞞をついたのである。

ドライデンの諷刺詩の代表的作品を選ぶとすれば『アブサロム』にこれを求むべきであらう。そこには叙事詩的威厳が感じられ、表現もベトラーより遙かに流麗暢達である。性格描写も簡にして機微をとらえ、余すところがない。しかし『ヒューディブラス』の重要なところは事件よりもむしろ宗教論争をたたかわす対話にあるとすれば、これと比較するべきは『牝鹿と豹』でなければならぬ。ドライデンはこれを書く約二年前に国教からカトリックに回心したばかりであつて、そこに痛烈な諷刺を期待することはできない。今日まで自らも陥つていた誤謬を指摘し、その非を改めさせ、できれば回心させたいという説諭詩である。従つて調子は温雅である。動物譚の形式をとつて、乳色の牝鹿(カトック)が罪知らぬ身の恐れも知らず、草を食んでいる。そこには熊(独立教会)、兎(クエーカー)、猿(自由思想家)、猪(再洗礼派)、狐(アリアン派)がいる。カトリックの立場は啓示を信じることに以外にない。理性や感覚は頼ることができないと説き、狼(長老教会)には人間の専制のうちで精神的迫害が最も悪く、キリストの道に反するとし、牝鹿について高貴な豹(国教)にはその聖餐、不可謬説、伝説について、カトリックとルーテル、カルヴィンの教の間をぬえ的に彷徨していると痛いとところをつく。牝鹿は、泉からわが家に同道した豹に一夜の宿をかす。この宿での対話は両宗派の現実面に対する辛辣な応酬で、カトリック教に対しては、今景気がよいと思つて喜んでいると、思いがけない逆境が見舞うぞと警告する燕の寓話、国教に対しては、国王の寵をあつめる鶏(カトリック教)に嫉妬した鳩(国教)が對抗策としてノスリ(一種の鷹)を王に祭り上げるが、これに食われてしまう話を織り交ぜる。鹿は非国教徒に対する刑罰法規、宣誓令が酷であるとして廃止を要求するが、これはジェームズ二世の信仰自由令により満たされる。

このように『牝鹿と豹』の物語としての事件の変化は殆んどない。性格描写も動物と宗派の特性がしつくり融合していない。むしろ奇異の感さえ与えられる。しかし宗教問答としての説得力は『ヒューディブラス』を凌いでいるといわねばならぬ。諷刺の痛烈さ、生地丸出しの人間味、こんこんとして尽きないウィットはバトラーのすぐれた持味である。しかし一つの詩として眺めたとき矢張りドライデンに数段の進歩を認めないわけにゆかない。

註1 一六六三年の日付になっているが、実際は一六六二年末である。(オックスフォード版『英文学年譜』参照)

2 ド・ピア氏は『レヴェュー・オブ・イングリッシュ・スタディーズ』四巻(一九二八)で『ヒューディブラス』第一・二部と『ド・チェスタ侯夫人へのロース卿の返信』以外はバトラーの殆んど全著作(散文も詩も)が一六六七年から一六八〇年の間に書かれたといっている。

3 ドライデンにはオリバー・クロムウェルの追悼詩からチャールズ二世即位奉祝詩に至る多くの哀悼、奉祝、礼讃の詩があつたことも両者の性格を示唆している。

4 バトラーの生地ウスタ州ストレンシャムの教区牧師で一七九三年彼の緒言、註を付して『ヒューディブラス』を出版した。

5 ド・ソラ・ピント教授『サー・チャールズ・セドレイ伝』一一四頁にはバトラーが一六七〇年夏バッキンガム公フランス派遣の際雇使したとの記事があるそうで、そうなれば総長になる前からバッキンガム公と関係があつたことになる。

6 オトウエイはナサニエル・リー『コンスタンチン大帝』(一六八四年印刷)の前口上で「スペンサーの死、カウリーの悲嘆、バトラーの忠誠と奉仕の酬いられざりしを彼等に告げよ」といつている。

7 多彩なということも、ザアロの詩の特性である。ドライデンは「この種の諷刺詩はエンニュウスの諷刺詩のように数種の詩形より成つているのみならず、散文も混つている。ラテン語の中にギリシヤ語がばらまかれていて」といつている。

8 『月の中の象』と同工異曲で、科学者への諷刺がみられる。因に斎藤勇編『英米文学辞典』(一九三七)の「シドロフェル」の項の記載は誤りである。

9 ヘンリー・ボーン編、バトラー『ヒューディブラス』